

ゲイン理論 復習

サッカー日本代表監督になったオシム氏の「日本人にあったプレー」という言葉を妙に感心し雷同しているラグーマンに、改めて温故知新の教を繰り返さねばならないのは残念なことです。

日本人のゲームに生かすべき特質については先哲によって研究し尽くされてきました。「size より tough」という W 杯の反省も生かされていません。世界のラグビーが進化したとはいえ、現状はその成果がラグビーの進化にマッチされチームづくりに生かされていないだけです。その復習と「ゲイン理論」の復習によって自信を養い、長所である瞬発力と伝統的団結力を生かして power と flair あふれるゲームを展開すればかならず道は開けると思います。

現代ラグビーは、伝統的固形競技から、自由で楽しい伸び伸びした活動による、細かい展開と前進を繰り返す競技としての面白さを発見し進化をとげてきました。その面白さを促進する競技用語とし生み出された言葉が GAIN です。

勝つための努力に対して得るものがあることが大切です。「得る」という意味の言葉は gain と get の 2 つありますが、どちらでも良いというものではありません。gain は得る、進める、進むという意味があり、gain ground 地歩を進める、gain on 侵入するといった使われ方をします。

ラグビーは大きい陣とり合戦という表現は正当なものではなく、gain ground を繰り返し続けてトライをとりあうもので、その間の工夫ややりとりが面白さの原点です。

相手を攻める攻撃目標地域 effective area へ向けて攻撃をしかけ、止めにかかる防御に対して再び味方が集まって攻撃続行地域で gain ground を意図していくものです。

以前はボールの線を ADVANTAGE LINE と言って利益の境目としました。

A.L よりの前進は利益(有利)として、大きな利益を求めてオープンへ展開を図るに対して、細かいスイッチ方向転換や執拗なサイド攻撃は negative と考えられました。

現代ラグビーは物質文明の合理主義の中で、前進を繰り返すとゴールに到達するという単純原理のもとに、ラグビーを本来の単純な競技であるという思想に重ねました。接点を「close」と「open」を並立し、stereographic 立体平画法を進めて、単純なぶつかりの繰り返しではなく、ハンドリングにより、スイッチにより、ぶつからなくてもよい個所からゲインを繰り返す power と flair あふれるラグビーをめざしました。ゲインポイントへの共通認識と、俊敏なポイント移動の連続が要点です。スタンドオフ half stand off half 即ち FW の後ろで離れて立っているプレーヤーという固定的スローな感覚ではなく、フライ half fly half という飛躍的で敏捷な名前をとり、動きも俊敏にすることを提唱しても殆ど顧みられない現状ですが、この論拠は古く 1870 年代 FW20 人、HB3 人、TB1 人、FB3 人で 1 チーム 20 人の時代の考え方によるもので、フランスのシャンペンラグビーの根拠ともいわれるものです。3・2・3 が一般的で押すことに重点をおいたスクラムが、3・4・1 展開に重点をおいたものに進化し、BK の中一番前に位置する SH が可能性があればボールを持って直進するのが当然と考え、思想が浸透したこともゲームをスピーディにしました。

言葉で簡単に言っても実戦での活用が問題です。はじけるようなシャンペンラグビーといっても現実的でなければ何のプラスもありません。ゲイン理論を現実的なものにする実戦ではチーム全員の gain ground のための gain line についての双方の相対的理解が大切です。

図を参照

- 1 . Gain and Tackle Line Causing Stalemate
 - 2 . Movement of the Tackle Line POSITION A.
 - 3 . Movement of the Tackle Line POSITION B.
- } 左の項目をクリック

防御に当たっては、タックルラインを押し上げることを考え、攻撃に当たってはゲインラインが up 前に出てきている場合とでは、次の展開が異なることを予測して対応するようにしなければなりません。展開の結果を見てから対応しては遅れて有効なプレーができません。状況と流れから着実にゲインラインを押し上げるプレーをするべきか、突破プレーを決行すべきかなどなどの意識もプレーに影響してきます。チーム全員がこれらについて共通認識のもとにベストをつくすことによって、チームのレベルがあがるのです。

よく使われる「前へ！」という言葉は、

No effective work is done until the ball close the gain line

常に gain する心がけよということです。

そのためには、前をよく見て判断 scan することが大切です。

Need for all to have a complete awareness of all that is going on - SCAN.

そして、ゲームの流れの中で常に、

go forward, support, continuity, pressure

一人一人が、今、何をすべきかを状況から予見し判断して、この4原理を確実に実行することです。そして、この「小さなゲイン継続」理論は、身体のサイズは生まれ付きのもので補足できませんが、それをふまえて敏捷で粘り強い日本人の特徴を往かせる日本らしいラグビーで世界に羽ばたく日本人に合ったラグビー理論でもあることは本当に幸いなことで、希望のもてる楽しい話です。理念無くビジョンもないままに外国の真似をしてもいつまで経っても浮かばれません。ラボラトリーを設置し推進することが叫ばれていますが、その中に「日本人にあったラグビー(プレー)」も当然含まれるもので、そうすれば、今日改めて一からそれを考える愚行を省くことができるのです。

2006.09.18

西川 義行